

稲作情報



No.5 「本田水管理～初期除草」

J A えちご中越 さんとう営農センター
TEL：0258（41）2887

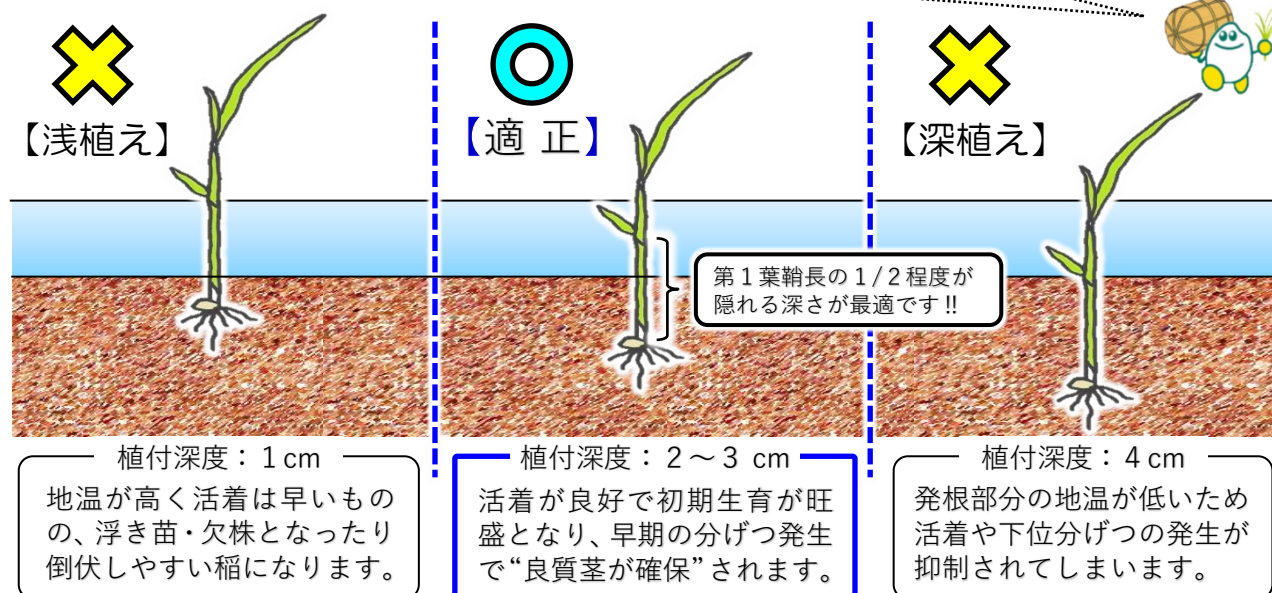
令和 5年 4月20日

① 品種特性に合わせた「適期田植え」でスタートダッシュ!!

② 適正な植付（深さ・密度）と水管理で初期生育を確保しよう!!

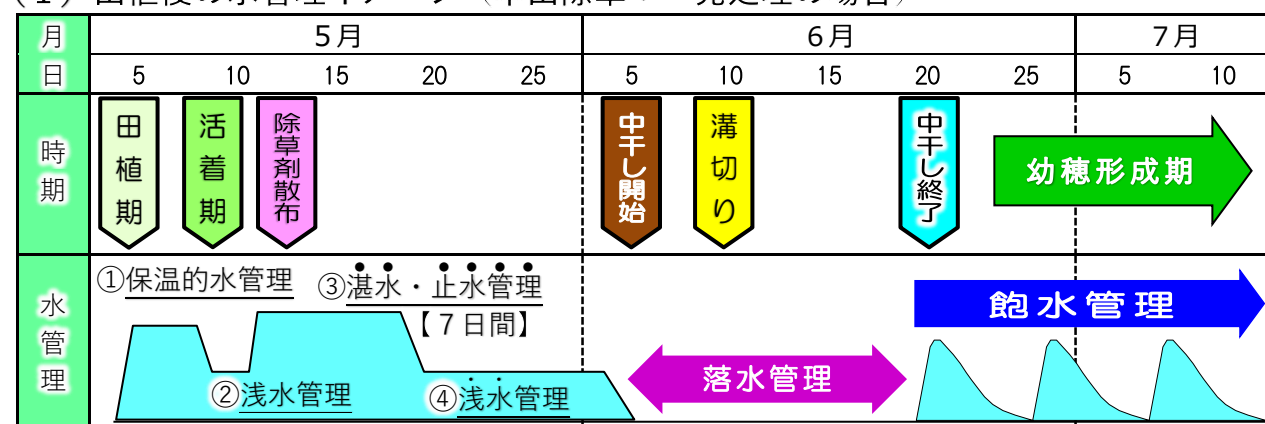
1. 植付深度をチェック!

植え付け深さは、初期生育の良否に大きく影響します。
特に「深植え」になりすぎないように注意しましょう!!



2. 植後の水管理キーワード → 「こまめな水深管理」

(1) 田植後の水管理イメージ（本田除草：一発処理の場合）



(2) 水管理のポイント

① 田植後～活着まで ⇒ “保温的水管理”

“3～5cm”のやや深水として、低温や風による植え傷みを回避します。

② 活着後 ⇒ “浅水管理”

水温の上昇を図り早期分げつを促進するため、“2～3cmのやや浅水”とします。深水にしすぎると日中暖められた水が夜間に下がりきらず、藻類が発生しやすくなります。また、日中に暖められた深い水によって稲は上に伸びようとするため、ヒョロヒョロとした軟弱な稲姿となります。

「水深スケール」を使って、しっかりと水深を確認しよう!!

活着後は「浅水管理」を徹底!!

SDGs⑬

★ワキの発生防止と★初期生育の促進を図りましょう!!

③ 初中期一発剤散布時 ⇒ “湛水・止水管理”

【*詳細は、裏面の止水管理イメージを参照】

除草剤散布後4～5日間は、水深3～5cm程度の湛水状態を保ち、散布後7日間はかけ流しや落水しないようにします。やむを得ず入水する場合、除草剤の処理層を壊さないよう静かに入水します。

④ 中干し開始まで ⇒ 田面の高いところが隠れる程度の“浅水管理”

除草剤散布7日後以降は2～3cmのやや浅水とし、ワキやアオミドロの発生を抑えるようにします。

右の写真は、ワキの発生により“赤枯れ”の症状が出た稲です。

地温の上昇とともに土壌中の有機物の分解が活発となるとときに発生するメタンガス（ワキ）によって根が障害を受け、分げつの発生抑制（生育停滞）や時には枯れ上がってしまうなど、その後の生育や収量に大きく影響します。

5月下旬は1年の中で最も日照時間が長く、地温の上昇により“ワキ”が発生しやすくなります。このような症状が見られた時には、水の更新や夜間落水によりガス抜きを行い、その後は“浅水管理”を継続します。

SDGs⑬：「気候変動に具体的な対策を!!」
→ワキの発生防止で「温室効果ガスを削減!!」



3. 病虫害防除を徹底しましょう!!

地域全体で、①葉いもち対策、②カメムシ対策を徹底し、病虫害の発生を防止しましょう!!

(1) 葉いもち対策 … 補植苗は速やかに除去・処分しましょう!!

補植苗は、いもち病の発生源となります。放置された補植苗で発生・増殖したいもち病の胞子は広範囲（500m以上離れた圃場）に飛散し、伝染してしまいます。
除草剤（初中期一発剤）散布までに補植を終了し、補植苗は速やかに処分しましょう!!

重要

★★ 葉いもち病 予防防除のポイント ★★

① 次表に当てはまる場合には、必ずいもち防除成分を含む育苗箱施用剤を活用します!!

① いもち病の発生しやすい地域	中山間地域や朝霧の晴れにくい・風通しの悪い沢地など
② いもち病の発生しやすいほ場	転作あとなど 過剰生育しやすいほ場、ケイ酸質不足のほ場
③ いもち病の発生しやすい品種	新之助・わたぼうし・越淡麗・こしいぶき など

② 育苗箱施用剤：ツインパディート剤を活用した葉いもち防除

育苗箱施用剤に含まれるいもち防除成分：イソチアニルは、施用後すみやかに稲体内に吸収されてイネ自身が本来持っている病害抵抗性機能を増強させる（侵入菌糸の伸長を阻害～死滅させる）ことでいもち病の発生・進展を抑えます。しかし、散布ムラや施用量が不足すると十分な薬剤効果が得られません。移植当日の散布は、作業時間に余裕を持って「1箱あたりの施用量：50gをしっかりと施用・均一に散布すること」がきわめて重要です!!

*密播・密苗は、「10aあたり使用量1kg」をめやすに1箱あたり使用量を調整（50～100g/1箱）します。

(2) 斑点米カメムシ対策

① 農道・畦畔、雑種地等の雑草管理

5月中下旬から「イネ科雑草（メヒシバ等）の種子が結実しない間隔」で草刈りや除草剤散布を徹底する。

② 本田内雑草の発生防止

ヒエ類やイヌホタルイ等の雑草が多発生しないよう水田内の雑草管理を徹底する。



【指名手配】
アカスジカメムシ

第1弾

ポイント

ポイント

地域全体で“春先からの雑草管理”を徹底することにより
「越冬世代をたたく!!」ことが重要なポイントになります。

裏面もいっしょに読んで!!

4. 本田除草のポイント！

除草剤の散布前にチェックして
“的確な雑草防除”に努めてネ！！

(1) 本田除草剤「散布前・散布時」の確認事項

水稻本田除草剤（一発処理剤）使用時の10のチェックポイント

No.	チェック項目（作業のポイント）	チェック
1	畦畔は、しっかり作られている → ねずみ穴 等からの漏水がない	☐
2	代かきは、ていねい（均平）に実施されている → 田面が極端に露出していない	☐
3	除草剤成分の拡散に必要な水深が確保されている （浅い部分を基準に水深確認 → 粒剤：3 cm 以上、 フロアブル：5 cm 以上、豆つぶ・ジャンボ剤：7 cm 以上）	☐
4	水口・水尻はしっかり止めてある → 多少の降雨で水田水がオーバーフローしない よう、“水尻は高め”にしてある	☐
5	散布時・散布後の天候をチェックする → 散布当日から2日くらいの間に「田面水のオーバーフローが心配されるような大雨」や「田面水が極端に片寄るような強風」が予想される場合は散布を避ける → *豆つぶ・ジャンボ剤は、特に風雨の影響を受けやすいので要注意	☐
6	使用農薬の登録内容（適用雑草と使用方法等）を確認してから使用する → 代かき後の日数、田植後の日数等を確認しながら、適期に散布する	☐
7	適切な植付深さ（2～3 cm程度）で丁寧に移植されている → 極端な浅植えや植付不良で根が露出したり浮き苗のある場合は薬害が出やすくなるので要注意	☐
8	田植同時処理を行う場合には、①薬剤を適正に使用し、薬害の発生防止に努めるとともに、②処理時（田植時）はひたひた水の状態で水尻を閉じ、作業終了後は適正な水深まで緩やかに湛水する	☐
9	補植が完了している → 除草剤“散布直後の補植”は、薬害を生じる恐れがあるので要注意	☐
10	ワキ・アオミドロ等の早発が懸念される場合には、登録内容の範囲内で除草剤を早めに散布する	☐

除草剤の効果を高めるには、丁寧な代かきで“しっかり田面水を保つこと”、“適期・好天日に散布すること”が重要なポイントになります。除草剤散布前から散布後までのポイントをチェックしながら、適正な管理作業で雑草の無い田んぼに仕上げましょう！！

「春の農作業安全運動」

を実施中です。

みんなで声掛け

「事故防止」

！！

【注意】
誤って育苗箱に除草剤を撒いてしまわないように注意して下さい！！

(2) 本田一発除草剤「散布後」の技術対策

<「除草剤処理後7日間は給排水しない止水管理」のイメージ>

～～ 除草剤を処理した後「7日間」は、田面の水を水田外に出さないように排水口を止め、さらにその期間は給水も止める方法です！～～

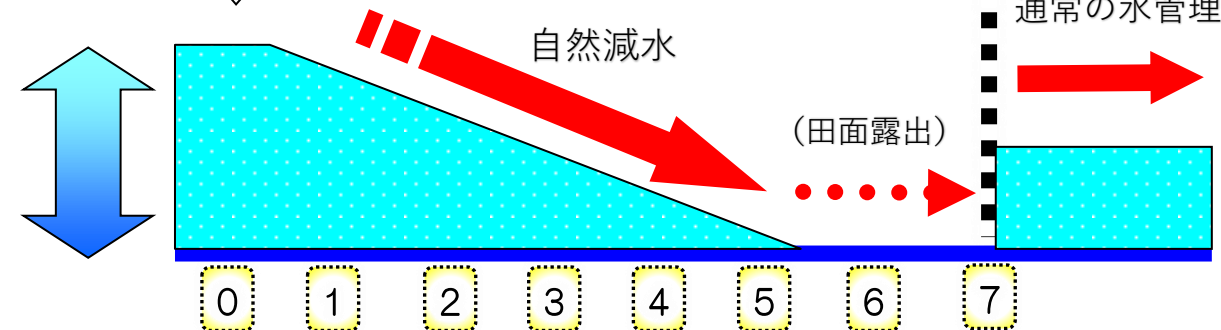
<散布時の水管理チェックポイント>

チェック項目	チェック
① 畦畔からの漏水を防ぐ	☐
② オーバーフローしないように排水口をしっかりふさぐ	☐
③ 水深が浅い部分で3～5cmになるようたっぷり入水する *豆つぶ・ジャンボ剤は7cm以上	☐
④ 給水を止めてから散布する	☐

降雨による田面水のオーバーフローで除草剤が流れ出てしまわないよう排水口を“しっかり”ふさいでネ！！

5～7日間は
給排水しない(注)

ポイント



★ 注意 ★

以下の場合、除草剤の処理層に影響しない程度の弱い水量で給水して田面水位を維持する

- ① 低温対策など、栽培上湛水が必要な場合
- ② 散布後すぐ（散布翌日）に田面が露出するような漏水田
- ③ 田面が露出し、ひび割れが出るほど乾いてしまう場合
→→→ オーバーフローに注意し給水する（*かけ流しに注意）

水田除草剤の“除草効果を高める”には除草剤散布後の水管理が最も重要です！！

除草剤処理後7日間は給水しない「止水管理」を行うことで、除草剤処理層がしっかり形成され、十分な除草（抑草）効果が得られるヨ！！

～～ 営農情報のお問い合わせは、お気軽に最寄りの営農センターへ ～～
次回稲作情報：5月下旬「中干し開始・終了の目安、葉もち防除、中後期雑草対策」（予定）